



「利他の精神で子どもが高め合い、地域と共にある学校」
～ 一人ひとりの Well-being (幸せ) の実現を目指して ～

令和8年9月30日

第6号

常盤北小だより

さいたま市立常盤北小学校

本は熱いうちに読め～私の読書流儀～

校長 中田 清人

読書の秋です。

北上次郎のペンネームでも知られる書評家、文芸評論家の故目黒考二さんは、読書して生活できる職業はないかと考えて書評家になったと聞いたことがあります。私は気持ちがよく分かります。私も、手の届く範囲に本がないと禁断症状が出てしまうくらいの活字中毒だからです。まあ、仕事にしたらして楽しめなくなりそうですが。

私の読書の流儀はいくつかあります。それは、予めこうしようとして始めたというよりは、長年の読書によって培われたルーティーンでもあります。

まず、興味をもった分野について関連する本を何冊か読んでみるということです。この夏は、昨年の夏に澤地久枝著「記録ミッドウェー海戦」を読んでいたこともあり、掘り下げるために大木毅著「ミッドウェイ海戦」を読みました。さらに、野中郁次郎他「失敗の本質」の「ミッドウェイ海戦」の章を再読したことで、より客観的なものの見方になった気がします。戦争関連から、城山三郎著「落日燃ゆ」を読み、広田弘毅という人物に興味を湧いたことから、田中正明著「パール判事の日本無罪論」も読んでみました。そして、太平洋戦争のおさらいのため半藤一利著「昭和史」を読んでいます。この本は、実に20年ぶりの再読ですが、当時付けたマーカーの位置が、今の頭で読んでみると「浅いな」と感じられておもしろいです。このように、一つのテーマや興味に沿って、理解を深めたり広げたりするために、複数の本を同時に読むということがあります。

次に、場所や時間で読む本を決めるというスタイルです。我が家のリビングには、先日亡くなった東海林さだおさんのエッセイ「丸かじりシリーズ」やグルメ漫画、釣りや将棋、サブラッド関連の本なんかが置いてあります。主に趣味に関係する本です。夕食前やテレビを見るときなんかにはペラペラめくって読みます。校長室の私の机にもたくさんの本が並べられていますが、朝の始業前には、松下幸之助氏や稲盛和夫氏の経営に関する本を、毎日数ページ目を通します。また、座右の書として、私が最も好きな「方丈記」が何冊も置いてあります。ふと手に取ったときに開いたページの部分を読みます。

以前にも書いたことがあります。私は読書が好きだからこそ、他の誰かに読書を押し付けることはしたくないと考えています。読書はあくまでも主体的で個人的な営みです。進められても、読みたいと思わなければ触手は動きませんし、仮にそれで読んだとしても苦痛でしかありません。夏休みの読書感想文に人気がない理由の一つはここにあります。

先日から、業間休みに校庭でジョギングをしています。興味をもった子どもたちが、私の後について走ったり、前を走ったりしています。特に、声をかけたわけではありませんが、興味をもってくれたのかなと思います。

同様に、昼休みは、図書室の入り口付近の座席で読書をするようにしています。校長先生は、何を読んでいるのかなと興味をもつ子もいるようです。子どもたちから質問を受ければ、どんな本を読んでいるか、どんな本が好きかなんて話をしますが、基本的には黙って本を読んでいる私の姿を見せるようにしています。

とにかく、運動もそうですが、読書も「読みたい」という主体的な熱い気持ちが大切です。その気持ちがあるうちに読みたい本を読むのが一番よさそうです。本は熱いうちに読めです。